

よりよい人間関係を築いていくための支援

特別支援教育班 坂田 哲男 (特別支援学校教諭)  
長田 みどり (特別支援学校教諭)  
瀧川 邦生 (特別支援学校教諭)  
藤生 昌彦 (特別支援学校教諭)

## I 主題設定の理由

### 1 現状と課題

人は、現在及び将来において、多かれ少なかれ人とかかわりながら生活する。特別支援学校の児童生徒もその例外ではない。特に卒業後は、新しい環境の中で仕事をしたり、余暇を楽しんだりする中で、新しい人間関係を築いていかなければならない。障害のある児童生徒たちにとって、人とのかかわりや人間関係を築いていくことは苦手であり、大きな困難が予想される。人とのかかわりや人間関係のささいなことで、職場や学校に居づらくなってしまふことが多々ある。こうした問題の解決の必要性は、現在、社会問題として、いたるところで大きく取り上げられている。今回の学習指導要領の改訂においても、特に自立活動の内容区分として「人間関係の形成」が新設されたことから喫緊の課題と言える。

私たちが現在担当している児童生徒たちは、活動の見通しが持てればグループのリーダーとして活躍したり、気持ちが落ち着いていれば学習や作業に集中して取り組めたり、コミュニケーションが取れる人に対しては素直にあいさつや行動ができたり、信頼関係のある大人や仲間とは協力して活動できたりするよさがある。一方、他の人の話の内容を理解することが難しかったり、相手の気持ちが分からなかったりすると、自分がどう行動していいのかわからなくなることがある。そのために、自分の気持ちをコントロールできなくなったり、善悪の判断ができなくなったりして行動すると、結果として相手に誤解されてしまうことがある。このような課題は「気がかりな姿」として現れている。

私たちは、現在及び将来の生活において児童生徒がそれぞれのよさを最大限に発揮できるようにするとともに、人間関係に係わる「気がかりな姿」としての課題を解決していきたいと考える。人間関係に係わる支援を積み重ねることで、人とかかわることは楽しいと思える児童生徒、積極的に人とかかわりたいと思う児童生徒を育てたいと考え、本主題を設定した。

### 2 「よりよい人間関係を築いていく」ことに係わって

私たちが社会の中で共に生きていくためには、自分と他人とのかかわりや、自分と集団との関係をよりよく築いていこうとする姿勢が必要である。そのためには、児童生徒が友達や教師と一緒にいたい、友達や教師とかかわりたい、一緒に活動したいと思えるような毎日の学校生活を考えていくことが大切である。それは何より授業の充実に他ならない。充実した日々の積み重ねが人とかかわろうとする意欲を培うことにつながっていく。さらに、人と人をより深く結びつけるためには、自分のことを知り、他の人を理解しようとして、お互いの思いや考えを伝え合うことが大切であると考えます。

以上のような考えに立ち、私たちは担当する児童生徒が自らの課題を解決しよりよい人間関係を築いていくための支援を行うために研究を進めることにした。

## II 研究のねらいと課題解決策

### 1 研究のねらい

よりよい人間関係を築いていこうとする児童生徒を育てるために、児童生徒の気がかりな姿

やよさのとらえや、支援の方法等の在り方について、実践を通して、明らかにする。

## 2 課題解決策

### (1) 児童生徒の気がかりな姿やよさのとらえに係わる基本的な考え方

私たちは児童生徒が気持ちをコントロールできなかつたり、善悪の判断がつかなくなつたりするなどのいわゆる気がかりな姿が目立つと、児童生徒のよさが見えなくなってしまうことがある。そこで、児童生徒への支援を考えると、見通しが持てれば活動に取り組んだり、相手の気持ちが分かれば行動できたりするなどの本来児童生徒の中にあるよさをとらえ直し、よさを支援に生かしていく。児童生徒に現れる気がかりな姿の背景や原因を考え、よさを生かして児童生徒にとって活動しやすい支援、分かりやすい支援を考えていくことにする。

### (2) 具体的な手だて

#### ① 課題の選定に係わる観点と目標の設定について

支援の方向性を確認するために、児童生徒の気がかりな姿を踏まえ、まず、よりよい人間関係を築いていくための優先課題を選定する。優先課題を選定することに係わる観点について、私たちは、現在の児童生徒の姿や将来の生活を踏まえ、次のような事項を考えた。

- a 場に応じたあいさつをする
- b 他の人の話を聞いたり、その話の内容や人の気持ちを理解したりする
- c 自分の気持ちを伝える
- d 自分の気持ちをコントロールする
- e 善悪の判断をする

次に、児童生徒それぞれの目標を設定することで、支援が明確になると考える。

#### ② 重点的に支援する授業や学習場面の設定と支援の方針の立案について

上記の目標の実現に向けて、支援の重点と考える授業や学習場面を設定する。設定した授業や学習場面についての目標や支援の方針を立て、それを踏まえて実践を行い、現れた児童生徒の姿から支援について評価し、次の課題や支援について明らかにする。

## Ⅲ 課題解決のための具体的実践

### 1 対象生徒A男(中学部)の実践

#### (1) A男の気がかりな姿とよさ

A男は、学級担任などの身近な教師には、興味・関心のあるテレビ番組の内容やお笑い芸人の話題について、意見を言ったり、感想を聞いたりして積極的に話をするができる。しかし、学習活動や生活場面などでこだわりがあり、人とかかわる場面で、自分にとって苦手な「ありがとうございます」「よろしくお願いします」などの言葉を使うことや人から聞くこと、特定の相手にしてほしい「ぐずったり、泣いたりする」行動を見ることがあると、気持ちを抑えられずに、大きな声を出したり、泣き出したり、その相手をなぐろうとしたり、パニックになってしまつたりすることがある。また、活動に取り組んでいて、気に入らないことがあつたり、疲れてきたりすると、ぐずったり、活動をやめたりすることがあり、慣れていない教師に活動の継続を指示されると、拒否したり、パニックになつたりすることもある。

A男は、まじめな性格で、好きな人や慣れている教師にはとても積極的に話しかけることができるよさがある。また、気持ちが落ち着かないときやパニックになったあとで、何が嫌なことだったのか、何が気に入らなかったのかを聞いてみると、こぶしを握りしめて泣くのを我慢したり、困ったことに直面して悩んでいるような表情をしたりしながら、自分のことを振り返り、その理由を思い出しながら、教師に訴えるように話すことができることもあった。

A男は、学習や活動の見通しを持つことができれば、落ち着いて活動に取り組めたり、やるべきことを理解した時は、まじめに頑張ろうとする姿が見られる。このようなA男のよさを生

かせる支援を考え、現れたよい姿を賞賛することを積み重ねる中で、人とのかかわり方を学べるようにしたい。人とのかかわり方が分かり、行動に自信を持って活動できるように支援していきたいと考える。

## (2) 目標の設定と支援の方針

### ① 目標の設定

課題の選定に係わる観点として、a・b・dを選定した。優先すべき課題は、リーダーとして最後まで活動に取り組むこととした。そして、これに係わる目標を下記のように設定した。

- 号令やあいさつを積極的に行うことができる。
- 活動の見通しを持ち、落ち着いて活動することができる。
- 苦手な活動や気に入らないことがあっても、パニックを起こさず最後まで活動に取り組むことができる。

### ② 重点的に支援する授業や学習場面の設定と支援の方針の立案

これを受けて、重点的に支援する授業の設定については、A男にとって見通しが持ちやすい作業学習を考えた。作業学習は、担当する活動や作業の要領等をほぼ一定にすることができたり、同じ活動場面で、同じ言い方であいさつや連絡報告ができたりする学習である。A男にとって見通しが持ちやすく、分かりやすい場を設定したいと考えた。

そこで、人とのかかわりが多い作業学習において、上記の目標を達成できるように作業学習における目標を、「相手に伝わるような声であいさつができる」、「見通しを持ち、作業に落ち着いて取り組むことができる」とした。この目標を達成するために、下記のような支援の方針を設定し、そのような場面を多く設定し、繰り返し取り組んでいこうと考えた。

- 号令やあいさつについてイメージが持てるようにするために、号令やあいさつの言葉が書かれた文字カードや文例を提示する。
- 自分の担当する作業に見通しが持てるようにするために、作業や道具等の写真カードを活用する。また、作業の終わりが視覚的に分かるように提示する。
- 何をどうしていいか分からない様子が見られる場合は、教師が手本を示したり、一緒に行ったりすることで、自分から活動に取り組めるようにする。

## (3) 支援の実際

実際の指導期間7月～10月、授業回数は12回（24単位時間）。環境園芸班（生徒7名教師5名）における題材「野菜を作って販売しよう」で実践を行った。作業活動における目標に係わる支援について記述する。

### 1 相手に伝わるような声であいさつをするための支援

作業学習で使う畑の地主さんへあいさつする場面で、7月の時は、みなの前に出てあいさつするよう言葉掛けをした。みなの後方において頭を下げることはできたが、声を出すことができなかった。9月の時は、準備段階で、地主さんに収穫をした野菜を持ってあいさつをしようと言葉掛けをして、あいさつ文の一例を示した。すると、自分で考えてその文例を修正し自分が読みやすい手紙を書き上げた。あいさつの場面では、みなの前に出て、地主さんの前で手紙を読み、きちんとあいさつすることができた。自分で考えた文を代表として読んであいさつができたことで満足そうな表情が見られた。お礼のお菓子やお茶をいただき、「ありがとう。」と小さい声だがきちんと言えた。

作業開始や終了時に、号令に合わせてあいさつすることや、号令をかけることを毎回言葉掛けした。また、教師が号令に合わせてお辞儀しながらあいさつをしたり、A男の隣で声を出してあいさつしたりするなどの手本を示しながら一緒に行うようにした。最初は、声はほとんど出なかったが、教師の模倣をし、お辞儀をすることや声を出すことが習慣になった。そこで、リーダーとして号令をかけるよう言葉掛けで励ましたり、もう一人の友達と一緒に

号令をかけることを授業開始前に話したりすると、班のリーダーとして号令をかけようという自覚が芽生えてきた。毎回少しずつ号令の声が大きくなり、10月の中旬には、教師が言葉掛けをしなくても、自分から進んでみなの前に出て、号令をかけることができた。賞賛すると、みなに聞こえるような大きい声が出るようになった。苦手な言葉「ありがとうございました」も一音一音ではあるが大きい声を出そうと努力をしている様子が見られた。

## 2 見通しを持ち、作業に落ち着いて取り組むための支援

7月～9月上旬は、A男の担任がT1として、作業内容を口頭で確認した。A男の作業中の支援もT1が行い、一緒に活動する仲間も同じクラスの男子と組み、慣れている環境で活動に取り組めるようにしたところ、緊張することなく、作業に取り組めた。しかし、作業の流れについては、理解できていないことが多く、道具運びも自分からしようとはしなかった。また、疲れてくると、しゃがむ、作業をやめる、作業に関係ない話を始めることが多かった。

9月中旬から10月下旬は、作業内容等を全て写真カード化し、ホワイトボードに掲示して説明した。班の生徒と教師の顔写真カード（以下顔写真カード）、苗・種子・収穫物の写真カード（以下素材写真カード）、種まき・水まき・除草・収穫等の作業をしている様子を写した写真カード（以下作業写真カード）、くわ・あぜかき・バケツ・リヤカー等の写真カード（以下道具写真カード）を用いた。まず、作業の内容とその順番を作業写真カードをホワイトボードに左から右に掲示して説明した。次に、顔写真カードをグループごとにまとめて掲示することで作業グループを確認した。そして、必要な道具について考えさせながら、道具写真カードを用いて確認した。また、用意できる場合は、本物の種や苗及び収穫できる実物を用意して作業内容を具体化し、作業意欲を高めるように支援した。このような支援を繰り返し行うことで、A男は、写真カードを用いて、作業の流れを復唱したり、質問を發表したりすることができるようになり、作業の見通しを持てるようになった。次に、作業範囲を棒やロープで示したり、種や苗などを小袋に分けたり束にして示したり、活動グループも下級生の男子と組むようにしたりした。そして、水の運搬や除草など苦手な作業では、グループの下級生と一緒に頑張ろうと教師が言葉掛けした。このような支援を繰り返すことで、作業の終わりが分かり落ち着いて作業ができたり、上級生として、もう少し頑張ろうとする様子が見られたりするようになってきた。疲れてきて作業に関係ない話をしようとしたときも、苗の成長の様子や除草や水まきの大切さを教師側から知らせたり、長い時間の作業が辛いことを共感したり、最後まで作業に集中しようと言葉掛けしたりすることで、7月～9月中旬の頃よりも集中して頑張る姿勢が多く見られるようになった。

### (4) まとめと今後の課題

#### ① まとめ

号令やあいさつの言葉や文などをあらかじめ具体的に例示したり、手本を示したりすることで、苦手な言葉を自分で言いやすい言葉に変え、場に応じた号令やあいさつができるようになってきた。例示の中に苦手な言葉を入れておいたが、あいさつをしようという気持ちが高まり、苦手な言葉も少しずつ言えるように努力している姿が見られた。担当する作業の内容と順番を、作業写真カードや素材写真カードで確認したことで、集中して説明を聞くことができ、作業の見通しを持つことができた。作業には、実際に作業の手本を隣で示しながら取り組んだ。教師の手本を見ながら上手に作業を行い、それを教師が賞賛することで、より集中して取り組み、責任を果たすことができた。種を小袋に入れることや苗を束にすることで作業量を示したり、除草や水まき等の作業範囲を棒やロープで囲んだりして作業の範囲を視覚的に示すことで、作業の見通しを持つことができた。また、教師も「ここまでできたら休憩だよ。」「もう少しで終わるから頑張ろう。」などと言葉掛けをすることで、A男自身からも「休憩まで頑張る。」「もう少しで終わるから頑張る。」などの見通しを持った前向きな言葉を聞くことができた。

これらのことから、上記のような支援を行うことで、A男は見通しを持って活動し、人とかわる場面でも落ち着いて行動することができた。

## ② 今後の課題

見通しを持つことができるように支援したことで、場に応じたあいさつをすることや人の話を聞いたり、自分の気持ちをコントロールしたりすることができるような姿が増えてきた。

今後は、作業学習以外でも見通しを持って取り組めるように、支援の方法や内容についてもより工夫していくことが必要である。また、学校教育全体で取り組めるように、担任や中学部全体で共通理解し、家庭とも連携して支援していくことが必要だと思われる。さらに、人とかわる様々な場面で楽しく充実した経験を積むことで、A男のよさをより発揮できるようにしていきたい。

## 2 対象生徒B女(高等部)の実践

### (1) B女の気がかりな姿とよさ

報告をするよう言葉掛けをしないと、報告をしないで、座ったままぼおっとしていたり、手悪さをしていたりすることがあった。また、報告する際「できたよ。」とB女から離れた場所にいる担当の教師に一方的に話をしている様子がたびたび見られた。

B女は、教師が「作業ができたなら次に何をしたら良いですか。」と言葉掛けをすると、すぐに報告することができるなど次の行動に移るためのきっかけを作ったり、次に何をしたらよいかの見通しを持たせてあげたりすれば活動に取り組むことができる。

### (2) 目標の設定と支援の方針

#### ① 目標の設定

B女の課題の選定に係わる観点として、a・dを選定した。優先すべき課題は、見通しを持って、自ら活動に取り組むこととした。B女の個別指導計画の長期目標は、自分の考えや気持ちを必要な場面で伝えたり、何をどうすればよいか分からない時に、「できません。教えてください。」などの言葉で伝える等、決められた場所で、決まった言い方で人と意思の疎通を図れるようになることである。これが、観点a・dに係わるものなので、本実践での目標ととらえることにした。

#### ② 重点的に支援する授業や学習場面の設定と支援の方針の立案

次に、担当教師に「できました。見てください。」「分かりません。教えてください。」等、決められた場面で、決められた言い方で報告や質問することが数多く設定しやすい作業学習において、連絡報告ができるようになることや気持ちをコントロールして穏やかな気持ちで取り組むことができることを目標に設定し、支援を考えた。6月から10月までのB女の変容を見ながら支援を積み重ねてきた。B女は被服班である。

- 連絡報告が適切な言葉遣いでできないときには、教師が適切な言葉遣いを示すことでB女が自分で確認できるようにする。
- 自分の担当する作業に見通しが持てるように作業工程見本を用意する。また、良い見本と悪い見本を提示することで、花作りのポイントを理解し良い見本に近づけるようにする。
- 気持ちが不安定なときには、別の得意な作業を取り入れ気分転換を図り、気持ちをコントロールできるようにする。

### (3) 支援の実際

1 「先生できました。見てください」と報告ができることを目標にした支援
-------------------------------------

1 学期（6～7月）
------------

報告をしないときには、教師が「できたなら次に何をしたらよいですか。」と言葉掛けをすると、報告をすることを思い出すことができ、「できたよ。」と言いながら、すぐに担当の
------------------------------------------------------------------------------------

教師のところに来て報告ができた。担当の教師のところへ行き、相手を見て報告できたら次の活動に進む経験を何度か繰り返した。しかし、「あのねえ、できたよ。」と言うことが多かった。そこで、「〇〇先生、できました。見てください。」と適切な言葉遣いを教師が示すと、それを模倣することで、報告の言葉を覚えられた。また、B女と教師とのかかわりを通し自分の立場と相手の立場を理解することができたようだ。

2学期（9～10月）

「あのねえ、できたよ。」と言うこともあったが、適切な言葉遣いで報告ができるようになってきた。そこで、今度は、B女が自分で確認できるように、「＜報告の仕方＞〇〇先生。できました。見てください。」と書いたカードを机上に用意するようにした。適切ではない言葉遣いをした場合には再度、「報告の仕方」のカードを確認することで適切な言葉遣いを思い出すことができ、相手を見て報告することができるようになった。

## 2 作業がうまくできないときにも気持ちをコントロールして穏やかな気持ちで取り組むことができることを目指した支援

1学期（6～7月）

○ 気持ちが不安定なときには別の得意な作業を取り入れ気分転換を図り、気持ちが落ち着けるようにする。

1学年から行っているひも作り（ミシン縫い）が上手になってきたことで被服作業に自信を持てるようになってきた。鼻歌を歌う、指の皮をむくなどの行為がたまに見られたが、泣き叫ぶ、寝転ぶなどの行為が減ってきた。そこで、自分の気持ちをコントロールすることを目標に加え、1学年では集中力がなく途中で投げ出してしまった花作り（手縫い）の作業の再挑戦を試みた。まず、作業工程を自分で確認できるように見本を用意した。はじめは、うまく作業ができないと「もうやだ。」と泣き叫ぶことがあった。気持ちが安定しているときに、再度、花作りを試みる機会を設けることで、作業工程見本を自分で確認しながらあきらめずに花を完成させることができた。

気持ちが不安定なときには、別の得意な作業に変更した。気分転換を図り、気持ちが落ち着いた後に、再度花作りを試みるなど得意な作業と不得意な作業を交互に繰り返し行った。花作りの途中で、「ひも作りをしてもいいですか。」と質問することがあったが、「花作りが上手になったね。花が〇個できたらひも作りをしよう。」と確認することで目標や見通しを持つことができ、安定した気持ちで花作りの作業に取り組めるようになってきた。

2学期（9～10月）

○ 意欲を持って作業を継続できるようにする。

花作りの作業を継続できることを目標に、花作りの作業時間を50分から100分、150分と増やしていった。「前回はお花を〇個作りましたね。今日は何個作れるかな。」と作業記録表を確認しながらB女に尋ねることで、前回よりたくさん作りたいと意欲を持って作業に臨むようになってきた。さらに、花作りの経験を積んだことにより、作業工程見本を見なくても花を作れるようになった。うまくできなかった作業ができるようになったことにB女自身が充実感を感じる事ができ、自信を持てるようになってきたことで、穏やかな気持ちで取り組める活動時間が増えてきた。

6月当初「苦手な作業も泣き叫ばずに頑張る」ことをB女が目標に作業をしていたが、さらに、B女自身が、「もっとお花を作ってほめられたい。認められたい。」という意欲が高まってきたことがうかがわれた。花作りの作業を自分が担当していることを自覚し、150分継続することができるようになってきた。

○ 困ったときには相談ができるようにする。

注意をされたり、うまく作業ができなかったりするときも、頑張ろうとする意欲が感じら

れるようになったが、相手に言いたいことをうまく伝えられなかったり、予期せぬ事態に遭遇したりしたときに、どうしたらよいのか分からず泣き出す姿が見られるようになった。このことについては、相手に自分の気持ちを伝えたり、困っているときにどうしたらよいのかを相談したりすることができるようになれば、気持ちが安定して穏やかに活動できるのではないかと考えた。

そこで、困った時に相手に相談できるように、「困っています」と書いたカードを用意した。初めてカードを見せた際、「困ったときには〇〇で困っています。どうしたらよいですか。」と相談できるように説明をすると、過去の困った経験を思い出し、泣き出してしまった。そこで、カードを机の上に用意しておき「困ったときには相談してね。」と言葉掛けをする程度にとどめた。カードを用意することで、困ったときには相談することを認識することができた。作業がうまくできないときに「泣きたくなくなりました。どうしたらよいですか。」と相談ができるまでには時間がかからなかった。さらに、B女の相談と教師の助言を繰り返すことで、信頼関係が深まり、集中して作業できる時間が増え、指の皮をむく、鼻歌を歌うなどの行為が減り、穏やかに作業ができるようになってきた。

#### (4) まとめと今後の課題

##### ① まとめ

「〇〇先生、できました。見てください。」と報告ができた後に次の作業に進むことができることを経験することで、必要な連絡報告を相手を見てできるようになった。言葉遣いや態度に変容が見られたのは、B女と教師との連絡報告の言葉のやりとりと教師からの助言や賞賛等のかかわりを通し、自分と相手の立場を理解することができたことによると考える。自分がすべきことを理解し見通しを持てれば、気持ちが不安定なときにも、気分転換をすることで安定した気持ちに戻ることができ、作業を継続することができた。努力をしていることを賞賛し認めてあげることで、途中で投げ出したい気持ちを抑え作業を継続する姿も見られた。B女と教師とのかかわりの中で「もっとほめられたい。認められたい。」という思いと、できなかったことができるようになったことへの自信が意欲につながったと考える。また、困ったときに、「泣きたくなくなりました。どうしたらよいですか。」と教師に相談できたのは、教師に対して安心感を持てるようになったからであると考え。教師から「顔を洗ってきたら。」と気分転換を促す助言に解決策を見つけることができたことで、B女からの相談が増え、相談と助言を繰り返すやりとりの中で、より信頼関係が深まり、自ら連絡報告ができるようになり、気持ちをコントロールし穏やかな気持ちで過ごす時間が増えた。作業学習で使用したカード「報告の仕方」や「困っています」は次にすべき行動を確認する上で有効だった。教室や職員室、他の授業等においても教師が用意しておき、必要に応じて活用できるようにすることで、他の場面においても連絡報告が適切な言葉でできるようになったり、気持ちをコントロールしたりする様子が見られるようになってきた。

##### ② 今後の課題

今後は、これらの支援を少しずつ減らし、カードがなくても自ら必要な場面で連絡報告ができる、困ったときには周囲の人に相談できるよう導いていきたい。B女から教師や友達にあいさつをしたり話しかけたりする姿が増えてきているものの、かかわりの少ない相手に対しては興味・関心を示さず意思の疎通を図れないことがある。そこで、作業学習においては担当教師を変えたり、被服製品の販売の活動を広げたり、地域行事の積極的な参加を家庭に促したりするなど学校と家庭とが連携を図り、多くの人たちとかかわれるような場を設定していきたい。コミュニケーションの楽しさを感じることができれば自分から人とかかわろうとする意欲を育てていけるものと思う。今後、周囲の人たちと信頼関係を深めていくことで、B女のよさを発揮し生き生きと活動できる姿が増えていくことを期待している。

### 3 対象児童C男(小学部)の実践

#### (1) C男の気がかりな姿とよさ

C男は、日常生活で繰り返し使われている身の回りの言葉、例えば、「カーテンを閉めてから着替えをして下さい。」、「椅子に座って下さい。」、「保健カードを保健室に置いてきて下さい。」などを理解していて、次の活動の場所や学習の手順などは写真カードに話し言葉を添えることで理解することができる。トイレに行きたい時や給食のおかわりが欲しい時などは、教師の肩をたたいたり、写真カードを触ったりして伝えることもできる。

一人でひもなどをひらひらさせながら遊ぶことが多いが、友達が遊んでいる様子をのぞきに行ったり、友達に自分の遊び道具を渡してあげたりする様子も見られる。しかし、ある特定の児童(以後はE男)の様子、行動が気になると気持ちが不安定になり、教師に体を押しつけてきたり、泣いたりする。E男の行動、存在自体が嫌なことを訴えてくることもある。普段は、気にしながらも、E男と手をつないで散歩に行く、同じ場所で学習するなどの様子が見られる。

#### (2) 目標の設定と支援の方針

##### ① 目標の設定

課題の選定に係わる観点、C男の実態を踏まえ、c・dを選定した。優先すべき課題は、人とかかわりを持ちながら活動することとした。

個に応じた目標は、個別の指導計画の目標と照らし合わせ、次の2つを設定した。

- 友達と一緒に仲良く活動できる。
- 困ったときに教師にカードを渡したり、話し言葉で伝えたりすることができる。

##### ② 重点的に支援する授業や学習場面の設定と支援の方針の立案

本学級では年間を通して生活単元学習で単元「作って食べよう」を設定している。買い物学習や栽培学習、季節の行事と関連させながら進めることが多い。今回は、単元「ホットケーキを作って食べよう」において、「作って食べる」ということを中心に材料、調理器具の準備や、実際に調理する中で活動に協力して取り組んだり、友達や教師が活動している様子を見たりして、周りの人とかかわることを意識しながら活動できる場面を設定し、実践することにした。

「作って食べる」という共通の目的意識を持ちながら活動に取り組むことで、C男とE男が一緒に仲良く活動できるようになってほしい。また、C男が気持ちが不安定になったときに、「気持ちを表すカード」や話し言葉で教師に伝えられるようになってほしいと思う。

単元「ホットケーキを作って食べよう」では、次のような目標を設定した。

- E男や友達と一緒にホットケーキを作って食べることができる。
- どうしていいかわからないときに、教師に、困った顔の絵がある「こまったカード」を渡したり、教師の肩を叩いたりすることができる。

支援の方針は、次のように考えた。

- 学習の見通しが持てるようにすること
  - ・ 写真カードを掲示することで視覚的に支援していく。



図1 写真カード

活動が終わるごとにカードを外し、今、行っている活動が分かるようにする(図1左)。

順番を顔写真カードで提示し、活動が終わるごとにカードを外す(以下、手順カードとする。)(図1右)。

- ・ 写真カードと話し言葉、写真カードと具体物が一致できるように繰り返し支援していく。

最初は、具体物を提示し、その名称を話し言葉、文字、写真カード(図2)で確認していく。その後、写真カードと一緒に話し言葉、文字を提示し、具体物を選べるようにする。徐々に、写真カードの提示を減らし、話し言葉、文字だけで具体物を選べるようにしていく。



図2 写真カード

- 自分の気持ちをコントロールできるようにすること

- ・ E男や友達の良いところを紹介し、安心して活動に取り組めるようにしていく。
- ・ 友達と一緒に活動したり、友達を手伝ったりすることができたときは、大いに賞賛し、C男が自信を持てるようにしていく。

○ C男が困っているときの支援について

- ・ C男の気持ちを教師が推測し、教師が代弁したり、C男の「気持ちを表す顔のカード」(図3)を渡すことで自分の気持ちを伝えられるようにする。



図3 気持ちを表す顔のカード

(3) 支援の実際 「ホットケーキを作って食べよう」(全6時間計画)

<p><b>1 ホットケーキを作る場面</b></p>
<p>○ 学習の見通しが持てるようにすること        手順カードで行う活動を伝え、活動が終わるごとに、手順カードを外すことを毎回の授業の中で行った。学習の見通しが持てるようになってきたのか、落ち着いて活動に取り組めるようになってきた。また、6時間目になるとE男の様子を気にしながらも自分から活動に取り組み、また、E男を含め友達とかかわり合いながらホットケーキを作ることができた。</p> <p>○ 自分の気持ちをコントロールできるようにすること        C男に友達が材料をかきまぜるときにボールを押さえる係を任せた。最初は、押さえることができず、教師と一緒にいったが、4時間目からは自分からボールを押さえられるようになり、「しっかりボールを押さえていて、〇〇君も頑張っているよ。」「すごいな、〇〇君が喜んでいるよ。」と教師がC男に伝えたと、とてもうれしそうな表情を見せた。また、「次は、〇〇君の番です。」と教師が言うと、その言葉を聞いていてC男は自分から次の友達の机にボールとボールに敷いていたタオルを移動することもできた。</p> <p>友達がホットプレートに生地をのせたり、フライ返しで裏返したりする様子を見られるように「C男君、座って〇〇君(さん)が頑張っているのを見ようね。」と言葉掛けをすることで、友達の様子を見られるようになり、4時間目には、笑顔で見ている様子があった。</p> <p>友達のホットケーキが焼けたらお皿にのせ、「〇〇君(さん)の机の上に置いてください。」と伝えた。最初は自分の分だけ配るという様子であったが、「友達の分も僕が配るんだ」という気持ちが出てきたのか、スムーズに配れるようになった。「C男君、上手に配れるようになったね、〇〇さんも喜んでいるよ。」と言葉をかけると、うれしそうな表情を見せた。</p> <p>○ C男が困っているときの支援        6時間計画の授業の中で、C男の気持ちが乱れることはほとんどなかったため、困ったときに自分の気持ちを伝える場面はなかった。</p>
<p><b>2 ホットケーキを食べる場面</b></p>
<p>○ 自分の気持ちをコントロールできるようにすること        「みんなで一緒にあいさつしてから食べます。」と言葉掛けをしたり、手順カードを示したりすることで、今行うことを確認した。最初は、食べたくて、ホットケーキを口にしようとしていたが、繰り返し、手順カードを示し、言葉をかけることにより、3時間目からは教師の合図でC男を含め全員がしっかり手を合わせ、「いただきます」のあいさつの後で食べ始めることができた。</p>
<p><b>3 片付けをする場面</b></p>
<p>○ 学習の見通しが持てるようにすること        「C男君、〇〇君(さん)のお皿も、お願いします。」とお皿を見せながら伝えたと、友達のお皿も流しに持って行くことができた。</p> <p>○ 自分の気持ちをコントロールすること        最初は少し嫌そうであったが、「C男君ありがとう。」と言葉をかけると、とてもうれし</p>

そうにしていた。5時間目からは、「お願いします。」と言葉をかけるとさっと片付ける様子が見られるようになった。

#### (4) まとめと今後の課題

##### ① まとめ

###### ○ 学習の見通しが持てるようにすること

ホットケーキを作って食べるという共通の目的があること、毎回の授業の流れをほぼ同じようにすることで学習の見通しが持てたと思われる。学習に見通しが持てるようになるとE男の様子を気にしながらも落ち着いて取り組んでいた。そのため、気持ちを乱すことがなく困っていることを教師に伝える場面はなかった。また、手順カードや写真カードを使うことで活動内容が分かるようになり、C男の活動の様子に応じて少しずつであるが、「一緒に行く→言葉掛け→見守る」と教師の支援を変えていったことで、自分から行う様子も見られるようになった。

###### ○ 自分の気持ちをコントロールすること

C男が最初は、嫌だなと感じたり、あまり関心がなかったりしたことも、頑張っていることを賞賛することで自分から活動に取り組む様子が見られ、友達と一緒に活動に取り組んだり、友達の分まで取り組んだりして周りの人とかかわりながら学習することができた。自分から取り組むという様子が見られてくると気持ちも安定し、表情も柔らかくなった。

###### ○ C男が困っているときの支援について

C男が困ったときのために「こまったカード」を用意したが、学習の見通しが持てたこと、興味・関心がある活動であったことにより、ほとんど気持ちを乱すことなく学習に取り組むことができた。また、C男の活動の様子を教師が賞賛することで自分の活動に自信が持てたこともC男が授業場面で困ることが少なかったことにつながったと考える。

##### ② 今後の課題

他の授業の場面では、E男の様子が気になると不安定になり、教師に泣いて体を押しつけてくるだけで、「こまったカード」を使ったり、教師の肩を叩いたりする様子にはほとんど見られていない。引き続き、「こまったカード」などで自分の気持ちを伝えられるように支援していきたいと考える。そのためには、気持ちが落ち着いているときにカードや話し言葉でコミュニケーションをとる経験を段階を踏みながら積んでいくことが大切であると感じた。また、今回のホットケーキ作りと同じように、分かる活動や自信が持てる活動を考えたり、日頃からC男が自分の気持ちを伝えられる場面を多く設定したりすることで、C男が、安心して活動できるという意識を持つことが「自分の気持ちを相手に伝える」一歩になるのではないかと考える。

#### 4 対象生徒D男(高等部)の実践

##### (1) D男の気がかりな姿とよさ

D男は、過去に勝手に女生徒の衣類を着用したことがあった。本人は、衝動的になったり我慢できなかつたりしてしまうらしく、自分でもどうにか改善したい気持ちを持っている。また、人とかかわりに関しては、いつも他の人の様子をうかがっていたり、自分のしていることに自信がなく消極的になったりしてしまう面が見られる。ささいな友達とのトラブルの際にも、感情的になったり乱暴をしたりしてしまうこともある。また、発言の中などで自分のことを否定的にとらえる傾向がある。日頃は、学校のきまりを守ったり、係の仕事をきちんとしたりすることができ、活動にまじめに取り組むことができる。卒業後の進路としては、一般就労を視野に入れて考えていて、生活の場も通勤寮やグループホームを希望している。

##### (2) 目標の設定と支援の方針

###### ① 目標の設定

課題の選定に係わる観点として、b・c・d・eを選定した。優先すべき課題は、自己肯定

感を持てることとした。次に、下記のような目標を設定した。

- さまざまな活動に自信を持って積極的に取り組むことができる。
- さまざまな状況になっても、落ち着いた気持ちで臨むことができ、安定した気持ちを持ち続けることができる。
- 自分から進んで人とかかわりを持つことができる。

## ② 重点的に支援する授業や学習場面の設定と支援の方針の立案

また、「気がかりな姿」とよさを踏まえ、次のような方針を考えた。

- 自己肯定感を持てるようにすることで、活動に取り組めるようにする。
- 衝動的な行動や欲求への対応の仕方が身に付けられるようにする。
- 自分の気持ちをコントロールできるようにする。
- ロングホームルームの性教育の時間を中心に、生徒指導の観点からも他の教科や領域の指導との関連を図る。

性教育は、体の大切さや体の発達などの基本的な事柄を学習することができる。また、今まで悩んでいたことやこれから直面するであろう課題などを話し合う活動を設けることで、友達や先生も同じであることに気付ける場面として適している。教師のかかわりとしては、他の授業においても、よい姿、いきいきした姿が見られたら、大いに賞賛し、自己肯定感が持ちやすいようにしていく。

## (3) 支援の実際

ここでは、自己肯定感を持てるようにするための支援について記述する。

<b>1 性教育:射精の仕組みを知る場面</b>
話の内容が恥ずかしかったり、質問の内容が答えにくかったりして、集中力が切れそうな様子が見られた。絵を使いながら教師の実体験を話し、仕組みについて説明をした。話を聞いているうちに、少し緊張していた表情から、時折笑い顔が見られるようになった。また、聞く姿も周囲を気にしてやや落ち着きがないように見られたのが、話し手をしっかり見て集中して聞いている様子が見られた。 教師の話や友達の発言を聞くことで、自分だけが特別ではないことが分かり、また、内容を理解することで、疑問や不安だったことがなくなり、結果として安心感を持ち、気持ちにゆとりを持つことができたのではないかと思われる。
<b>2 性教育:射精などの気になることや悩みを考え、適切な方法を知る場面</b>
自分の考えや困っていることをなかなか言うことができないでいたが、小グループで意見を出し合う場面では、一生懸命に考えている様子が見られた。話し合いが滞っている時に、教師がヒントを言うと、自分から意見を言おうとする様子が見られた。 仲の良い友達が司会になり、言い易い状況であったことと、困っていたことが教師のヒントにより解決したことで、積極性が出てきたのではないかと思われる。
<b>3 ホームルーム:個別の話の時間</b>
性教育の授業後、感想の中では「女性の話は、少し難しかった。マスターベーションが分かった。男性と女性の体はどう違うのか。」などと書いていた。それに係わって個別に話をしたりする時間では、「大丈夫！先生と約束したから、他の人の迷惑になるようなことはもうしない。」と話すなど、自分から教師に話をすることが多くなってきた。また、話の中で、自分がいつも悪者になっていることや人からからかわれることが多い、などの内容のことがなくなり、「生徒会の仕事を頑張りたい。」や「将来良い仕事に就きたい。」と話すことが多くなってきている。 個別に話を聞く機会を繰り返してきたことで、本人が緊張をすることなく、いろいろなことを自分から話せるようになってきている。また、信頼関係が少しずつ持てるようになるこ

とで、本人の教師との約束を守りたいという気持ちがしっかりとしたものになってきている。

#### (4) まとめと今後の課題

##### ① まとめ

意図的・必然的に人とかかわる場面を多くしたり、自分の気持ちや困っている状況を話す時間を設定したりすることで、落ち着いた生活を送ることが多くなってきた。また、さまざまな人とかかわる中で、自分から進んで会話をすることもできている。そのため、周囲から態度や生活面で良い評価を受けるようになってきた。そのため、本人が自分の考えや行動に自信が持てるようになり、自己肯定感が更に高まっているようである。良くないことはやめて、周囲に認められいろいろなことを頑張りたいという向上心も見られてきている。性教育で基本的な知識が身に付き、困っていることが解決したり、友達や先生と同じであることが分かったりすることで、普段の生活や学習で意欲的な取組が多くなっている。

##### ② 今後の課題

予想できない状況や不特定の人とのかかわりになると、自らかかわりを持つことが困難な様子が見られる。不意に起こる状況を意図的、計画的に設定し、その中で課題を解決する力を高めていきたい。また、不特定の人とのかかわりに関しては、必然的に人とかかわる場面を増やしていくことで、知らない相手であっても、あいさつや会話をしようとする姿を引き出していきたい。継続的・計画的に性教育を行い、基本的な知識の習得、それに係わっての個別の悩みなどを聞く時間を多く設定することで、自己肯定感が持てるようにしていきたい。

#### IV 研究のまとめと今後の課題

##### ○ 「気がかりな姿」のとらえと基本的な考え方について

本研究において、自分の気持ちがコントロールできない、善悪の判断ができないなどの姿を、私たちは気がかりな姿としてとらえた。一方、児童生徒の側に立って、見通しが持てれば活動に取り組んだり、相手の気持ちが分かれば行動できたりするなどの児童生徒のよさを生かして支援することを考えた。気がかりな姿を踏まえつつも児童生徒のよさを生かすという考え方に立つことで児童生徒を支援しやすくなることを再確認することができた。

##### ○ 課題の選定に係わる観点と目標の設定について

児童生徒がよりよい人間関係を築いていくため優先される課題を選定する観点として、5つの事項を考えた。観点を考えることで、優先すべき課題や目標を設定するのが容易になり、支援の方向性が明確になった。支援を考えようとする場合には、方向性を示すための事項を上げておくと課題や目標が導きやすいことを実感した。

##### ○ 重点的に支援する授業や学習場面の設定と支援の方針の立案について

本研究では、重点的に支援する授業や学習場面を設定し、その中で行った支援の有効性を考察した。支援する場面を限定したことで、その有効性を明らかにすることが容易であった。

##### ○ 今後の課題

- ・気がかりな姿の背景を探ることで、認知発達、語彙力、知的理解度等、いくつかの課題の解決が必要であることについては、十分な支援を行うことができなかった。
- ・個別の指導計画の作成と活用に戻り、人とかかわりや人間関係を築いていくという視点から、教育課程全体での支援を見据え、他の指導の形態との関連を図りながら一人一人の児童生徒の課題を解決できるようにしていきたいと考える。
- ・充実した日々の積み重ねは授業を大切にすることでもある。本研究では、授業づくりについては、十分な実証はできなかった。それぞれの授業づくりについてもさらに研究を深め、授業改善を行いたい。